

SSKW

海から海へ

No.26 2011.3.29

【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ
〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5
マートルコート調布407
Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878
<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



チューリップがいにね Charming Tulips 910x727 2009 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

東日本大震災に被災された多くの方々に お見舞い申し上げます

東日本大震災に被災された多くの皆様にお見舞い申し上げます。水や食料の不足、寒さ、喪失の悲しみに耐えてらっしゃる方々を思うと胸が張り裂けそうです。

近くの知り合いに、福島県南相馬市と相馬市にご実家のある方がいらっしゃいます。福島原発の事故により、屋内退避の対象になっているため、県外へ移動を考えていると伺ったので、本法人の田中瑞木美術館の一部のスペースを仮の住まいとして提供できることをお伝えしました。ふとんも2組あり、台所付きですので、2、3人のご家族の当座の生活場所になるかと思えます。(21日現在、実家のご両親は、まだ土地から離れる決断がつかないとのことです。)

美術館はしばらくのあいだ休館とさせていただきます。ご承知くださいますようお願い申し上げます。

海、原子、いのち

2011年3月11日午後2時47分、東日本に沿う太平洋の海底、幅200km長さ500kmの領域が、マグニチュード9.0の大きさで動き、その上の海水の振動が日本列島に伝わりました。ふだんは静かな海が、長大な水の高い壁となって東日本の海岸全域を襲いました。

地震と津波による死者は分かっているだけで9千人、行方不明者は1万数千人と伝えられています。喪失の悲しみの中、雪の舞う避難所に、水や食料の欠乏と、寒さで刻々消耗する体力に耐え、救援を待つ40数万の人々がいます。

太平洋沿岸にある東京電力福島第一原子力発電所の6つの原子炉が津波にのまれ、冷却能力を失いました。その結果、高温下、燃料被覆金属と水が反応して発生した水素が爆発し、発電所の建屋を吹き飛ばしました。プールに保管されていた燃料も冷却できなくなり、ヨウ素やセシウムなど放射性物質の漏洩と拡散が報じられています。燃料から発生する熱の定期的除去に向け、電源の復

旧が進められていますが、炉心のメルトダウンが海水放射線等による応急冷却でかろうじて免れている状況です。

大地や海を構成する全てのものは百数十種類の原子に還元されるという事実の把握は、原子の核分裂や核融合の発見に至りました。しかし、発電のための核分裂は、地球の振動や海水の大変動により、いとも簡単に制御不能になることが分かりました。

海は広く深いとは言え、宇宙に生じた一つの現象に過ぎません。すべてのいのちはその海から生まれました。海はいのちを支え、人々に幸をもたらします。しかし、地球の少しの身震いにより、海は私たちに大きな被害と深い悲しみをもたらしました。まことに非情ですが、海は何かを教えていると思います。わたしたちは、海から教わったことを今後の役に立てたいと切に思います。

地震、津波、原発事故により家を失った人々のくらしをどう立て直していったらよいかか問われています。提供できる住居とそれを必要としている人とのあいだをどう結びつけたらよいでしょうか。早急に仮設の住宅を建てなければなりません。これまでの暮らしのつながりを維持しつつ、と思います。居住の場所での医療、心理、就学、就業のサポート、すべてが今、早急に必要とされています。どのように進めたらよいでしょうか。

くらしにとって大切なものは何でしょうか。人はどんな生活を望み、何が必要と考えるのでしょうか。そのためにどんな活動をすればいいのでしょうか。社会を動かしているものは何でしょうか。大切なのは便利さでしょうか。人に依存しなくてすむ生活でしょうか。そのためのお金でしょうか。みな当たり前と思っていることについて考え直さなければなりません。

奇跡とも言えるいのちを実感し、いのちのつながりを大切にするとところから、すべてが始まると感じます。

(阿部公輝)

2011年の春に

この半年間、「海から海へ」は休眠状態でした。その理由は理事長(夫)が精神保健福祉士の資格取得のため、スクーリングや受験勉強などに勤しんでいたためです。3月に合格の知らせが届き、私も肩の荷を降ろしたような気持ちになりました。なぜなら、夫が、正規の仕事の

前に勉強時間をとるため早起きに協力すること、昼食をとりながらも勉強できるようにとお弁当を持たせること、勉強時間確保のため夫の家事を減らすこと、土日に家族の時間は無いものと考えることなどを、心に決め協力をしてきたからでした。あらためて社会福祉士の先を目指した、理事長の努力には敬服します。

さて、そのような状況であっても、画家は日常を平穩に過ごしています。そして、絵の制作を続けています。最近、「蝶の宙」が完成しました。宙に蝶が2匹、飛んでいるのか静止しているのか私には不明ですが、います。左右に木が1本ずつあります。

上の方の蝶を見つめていると、人が浮かんできます。影絵の中で見たことがあるような一人の女性像のようです。誰もが大人になったころ、ここに影の部分を持っていることを示唆しているような、美しいあるいは醜い自分自身を見るような気がします。

私は、学校等にカウンセラーとして出かけることが週に2回あります。私が留守の間、仕事が休みの水曜日であれば、瑞木は家中を掃除します。掃除機をかけ、雑巾がけをし、風呂場もトイレも洗面所も磨いてくれます。パン作りもします。夕方の炊飯器の準備もします。洗濯物を取り込みたたみます、生協の宅配品を受け取り収納します。新聞屋さんがくれば支払います。買い物も頼まれば、します。

私が帰宅すると、「みーちゃんがしたの」と言い、きれいになったところや出来上がったロールパンを見せてくれます。「こんなにたくさんのことをして疲れないの」と聞くと、「疲れないの」とニコニコ顔で答えます。私は自分だったら、こんなにできないのでどうしてなのかとずっと考えてきました。考え付いたのは娘に関する以下のことです。

1. 退屈は嫌という気持ち
2. 家が汚いのが嫌という気持ち (祖母譲り)
3. 私に喜んでほしいという気持ち
4. いろいろできるという自信の表現
5. ほめてもらいたいというこころの現われ
6. ありがとうと言われたいというこころの現われ
7. 自分が誰かの役に立っているという安心感

わずかな事象から何かがわかったなどとは言えないと自戒を込めつつ考えます。

人は自分でも良くわからないこころの暗さを抱えているのではないのでしょうか。それを意識することも、しないこともある中で、自分を生きているのではないのでしょうか。

いままで、瑞木に影を見ることを考えたことはなかったのですが、絵を通じ、当然影があると知らされたような気がして、むしろ、私のこころは落ち着きます。

3月8、9日にグループホームの仲間、家族や支援者12人で、ディズニーランドへ社会見学の旅をしてきました。社会見学をすることが仲間の生活の幅を広げます。仲間たちは何回も行った場所であっても、家族や支援者ははじめての方もいて、遊園地がどのような雰囲気なのか、仲間たちがどのようなことに興味を持っているのを知り理解する良い機会でもあります。

アトラクション、買い物など非日常のムードを楽しみ、夕刻ホテルに到着。宿泊の醍醐味は普段と違う経験をたくさんすること。夕食はサービス付きの宴会場で、ナイフとフォークの西洋料理。季節の食材を使った変わった料理に舌鼓、少し緊張も経験のうちです。その後はお楽しみのカラオケ。9時までたくさん歌いました。

昨年末、忘年会にグループホームにかかわる支援者、家族など、大勢の方々が参加されました。その盛り上がりぶりに感動しました。11年前、親たち3人が地域に種をまきました。根や芽が出て、葉が茂り、花が咲くようにと努力を重ねてきました。親亡き後の暮らしを地域にと願う、その夢を実現させるまでの道のりはさまざまな困難を伴い、そう簡単ではありませんでした。そのことが胸に去来し、目の前の大勢の支援者にジーンと熱くなりました。グループホームの暮らしを通じ、地域に支援の輪がもっと大きく厚く深く濃くできることが、これからの新しい目標です。

自分らしく生きるという大きな命題を持ち続けているため、目の前の大切なことに眼が行かなくなっているのではないのでしょうか。自己実現をすることが生きる目標で、自分にばかり眼が行っている大人が多いなと感じているのは私だけでしょうか。子どもたちと一緒にいると、子どもはお母さんを見ているのに、お母さんは子どもをしっかり見ていないと感じることが多々あります。

日々の暮らしの中に自分が大事にしている宝物があることに気づくことが、人のこころを、穏やかに、しなやかに、強く、本当に自由に、してくれるのではないのでしょうか。宝物は能弁ではありませんので、私達が耳を傾けないと目を凝らさないと分かりません。弱者と思われる人々から、私達は多くのことを教えてもらっていることに気づき、一緒に歩いていきたいと思えます。

一人では生きられない私たちです。それを知ることで、人は謙虚になって、誰かの役に立つことを誇りにして生きていくことができたらいいなと思えます。

(阿部愛子)



「蝶の宙」と画家



ディズニーシーで

編集後記

この1年、職場の大学で、本来の仕事に加え、研修などを受け持つ部署に関わってきました。大学教育の目的は、学生が自分の力に気づき、成長するための支援を行うことです。教職員は、専門とするさまざまな分野で、それぞれの学生に対してこのような支援を行う必要があ



ディズニーランドのホテルの前で全員集合

ります。社会は変化し、学生はそれぞれ異なります。専門家として常に研修を要する所以です。

今年度は、現代社会における大学の役割、近年の学生の状況と雇用の情勢など、高等教育論の視点から学ぶこと、教育の場における心理臨床の重要性を再認識すること、国内外における大学教育の手法に関する先進的な事例を知ることなど、専門家を招き、連続講演会・シンポジウムを開催しました。来年度は、グループワークなど双方向の学びや、教員への個別支援を計画しています。

副理事長(妻)が書いているように、この半年ほど本法人の活動は休眠状態でした。おかげさまで精神保健福祉士の資格試験に合格しました。言い訳のようですが、もう一つの理由として上のことがありました。職場でも、学生の支援のために良い仕事ができたと感じます。

本法人での実践を通して、学んできたことがあり、それがさまざまな貢献に結びついていると思います。多くの方々に感謝します。

来年度は、さらに活動を充実させたいと思います。よろしくお祈りします。(輝)

特定非営利活動法人 海から海へ
<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp
2011年3月29日 海から海へ No.26
編集責任者 阿部公輝
〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5
マートルコート調布 407
Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878
発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧 6-26-21
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会
定価 200 円
無断転載禁止